

放送人の会

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

TEL&fax 03-3221-0019 E-mail info@hosojin.com

代表幹事 今野勉 編集担当 伊藤雅浩、鈴木典之、松尾羊一

No. 36

2008.5.28

放送人グランプリ2008(第7回)贈賞式



写真・上段、左から 岩堀政則 (NHK) 角英夫 (NHK) 上里猛 (琉球朝日放送) 野沢周平 (琉球放送)

下段、左から 村木和歌子 (高志氏夫人)、村木高志 (故村木良彦氏長男) 松平定知 (元NHK)

阿武野勝彦 (東海テレビ) 木原くみこ (三角山放送局)、島袋夏子 (琉球朝日放送)

【グランプリ】阿武野勝彦

ドキュメンタリー「約束〜日本一のダムが奪うもの」裁判長のお弁当」の業績に対して (東海テレビ)

【特別賞】松平定知

「その時歴史が動いた」ラジオ深夜便「藤沢周平を読む」などの優れた業績に対して

【特別賞】NHKスペシャル「シリーズ・激流中国」制作スタッフ

07年から08年4月まで11回にわたって、激流のごとく変化する中国の現状をとらえた優れた業績に対して

【特別賞】木原くみこ

バリアフリー・スタジオ創設など、コミュニティラジオにおける10年にわたる業績に対して (三角山放送局)

【奨励賞】野沢周平

ドキュメンタリー「揺さぶられる歴史」教科書検定をめぐって」の業績に対して (琉球放送)

【奨励賞】琉球朝日放送 報道番組「消したい過去 消せない現実」文科省 疑惑の教科書検定

右記の制作放送の業績に対して

【放送人賞】故 村木良彦

放送人としての多大の功績に対して

第7回放送人グランプリに想う 今野勉

村木良彦さんが提案し、自ら運営の実務担当をしていた放送人グランプリは、ことし第7回目を迎えた。

その内容については別項に詳しいが、これまでとは変わったことがある。村木さんがことし1月に亡くなったことである。村木さんのあとを引きついで運営にあたった堀川とんこうさんと選考委員の皆さんは、そのことを胸に選考に臨んだ。そして、悲しみをバネに素敵なアイデアを創出してくれた。

村木良彦さんのために、放送人賞を新しく創ったことである。最初、選考委員の皆さんは、これまでであった特別賞を贈ろうと考えたようだ。しかし、どうにも、気持ちがつつきり納まらない。そして、辿りついたアイデアが、放送人賞であった、ということである。

堀川さんからその報告を聞いて、私はとても嬉しく思った。よくぞ放送人賞なるタイトルを考えついたものと、感動した。

放送人という言葉が最初に使った人（つまりは、その言葉を発明した人）は、梅棹忠夫さんである。そのことに敬意を表して、第1回の放送人グランプリの特別賞は、梅棹さんに受けて頂いた。

放送人という言葉の前に、新聞人や

映画人という言葉があり、放送人という言葉はおそらく新聞人、映画人という言葉に対応して考えだされたものであろう。

しかし、新聞、映画、放送などのメディアに先行する文学界には、文学人という言葉はない。写真界にも写真人という言葉はない。

新聞や映画や放送というメディアは、組織や設備を前提として成立するメディアである。文学や写真は、個々の表現者によって成立している。その違いが「人（じん）」を成立させているのであろう。

つまりは、放送人は組織や設備を共有する人々ということであろう。そのことは逆に、私など、強烈に、私自身の個としての表現者であることの可能性を意識させる。

集団作業で作りあげるものの中で、個であることの困難と必要性――。

私の経験で言えば、この矛盾の中でもがいてきたことが、放送人としての証しのようなものだと思っている。

今回の受賞者の名を、放送局の一人という面を出すか、制作者個人を前面にするかで、デリケートな問題が少なからず生じたようだ。

放送人の会は、組織を超えた個々の放送人の集まりであるから、とうぜん制作社個人を受賞の対象にしたい。

しかし、放送人は、組織の人でもあつる。それを無視するわけにもいかない。受賞対象者の肩書や所属など、よく見て頂ければお解り頂けると思うが、そのあたりデリケートな側面の苦心のさまが現れているのである。

今後も放送人賞が続けられるかどうか、まだ決まっていないようである。もしかして、放送人グランプリの提案者である村木良彦さんだけに贈られる限定賞であるのかもしれない。それで

もよいし、その方が村木さんに対する最大の敬意の表し方になるのかもしれない。

ことしもまた、受賞者の方々の素敵な言葉が、贈賞式やそのあとの懇親会で聞くことができると思うと、私は、今から胸ときめく思いである。亡くなった村木にそう言っても失礼にはあたるまい。彼もきっと喜んでくれるはずである。

（5月9日・記）

放送人グランプリ2008選考を終えて

堀川とんこう



村木良彦さんが果たされた役割を遺漏なく引き継ぐことは所詮無理と承知しつつ後任をお引き受けしたが、想像以上に気骨の折れる作業だった。選考委員をやっていたいた河野尚行さん、中村美美子さん、山田良明さん、石井彰さんの四氏には随分とお力を貸していただいた。

選考委員会は四月七日に行い、四時間を越える協議をした。「放送人グランプリはユニークでありたい」と多く

の会員が考えている。他の賞が見落とされた隠れた秀作を見落とすまい、地道に努力している真の放送人をはげめしたい、と思っている。選考委員会も同じである。その精神に基づいて推薦状は書かれるわけだから、対象は当然バラける。50人の会員から寄せられた推薦は約70件で、最も票を集めたもので四票だった。単純な集計で賞を決定することは到底できない。

推薦状に見られる会員各位の目配りの良さには驚かされた。これだけの数の目が放送界をウオッチしているというのには凄いいことだ。

また同時に、番組や個人に注がれる推薦者の愛情濃やかな視線にも心を動かされた。

受賞者の言葉

ホームランボール

東海テレビ 阿武野勝彦



選考の結果は「放送人の会」らしき
ある順当なものと思うが、選考の過
程ではかなりの苦渋を味わった。番組
を比較する場合、重要視すべきは視点
の新鮮さなのか、作品としての完成度
なのか、企画のタイムリーさなのか、
積み重ねられた努力の量なのか。結局
は、そのすべてを考慮した総合評価と
いうところに戻ることになる。議論を
尽くした上で、最後は委員の票決とい
うことにした。

賞には漏れたが、触れておきたい推
薦がいくつかある。

「私の出会った戦争（NHK佐賀局）」
「われら愛すく国歌・国民歌について
の考察（山形放送ラジオ）」「大原れ
いこ、坂本良江（小田実・遺す言葉）」
「指揮者岩城裕之・最後のタクト（北
陸朝日放送）」などである。

いずれも顕彰に値する力のこもったも
ので入賞を逸したことは残念である。
故・村木良彦さんについては議論の
結果、放送人賞という特別な呼称を用
いて氏の広汎な業績を讃えることにし
た。今回限りの賞である。

選ぶ人が変われば入賞者の方向も顔
ぶれも変わる。是非とも多くの方に選
考委員になっていただき、益々魅力あ
る賞にしたいと思う。

最後になったが、事務局の北村充史
さんにはトロフィーの発注や新聞発表
資料の作成・配布など実に多くの実務
をやっていたいただいた。感謝に堪えない。

私の周りでは、例年がないロンググラ
ンの『エープリル・フル』が続いて
いました。四月も半ば、他愛のないウ
ソの応酬に飽きはじめて頃、「またして
も…」という電話がありました。

『放送人の会ですが…』その時、私
は永六輔さんと、かつてのドキュメン
タリーの現場を旅する企画「時代の肖
像」の編集をしていました。受賞の電
話は、エープリルな感じでした。「なん
だかグランプリだって…、放送人の…」
「その電話、鹿児島弁じゃなかったで
すか…」相棒の編集マンは、ウソの応
酬相手の仕事ではないかと、背を向け
たまま、軽く笑いました。

私は、余計なことばかり考えては、
失言を繰り返すアンバランスな男で、
『放送人グランプリ』は、いわば吾が
人生の出会い頭のホームランだと思っ
ています。しかし、これは、私が打っ
たボールを、我がスタッフが、フーフ

ーと口で吹いて、あるいは内輪で扇い
で、無理矢理スタンドインさせた、そ
んなホームランです。

番組『約束』は、食らいつく取材に
還暦カメラマン塩屋久夫（鹿児島弁の
人）が渾身の勝負を挑み、私が悲鳴を
上げて土俵を割らせない山本哲二の
執拗な編集の咎、そして、番組を読み
込む森哲弘の音響効果の作業…『裁判
長のお弁当』は、裁判官室の毎日毎晩
の弁当に注目せよという突飛な発想に、
真面目に取材を積み上げた齊藤潤一デ
イレクター、板谷達男カメラマン、そ
して、シャープさと安心感を併せ持つ
奥田繁の編集…。スタッフ誰一人欠け
ても、番組は成り立ちませんでした。
このフーフーして唾だらけになったホ
ームランボール（グランプリ）は、ス
タッフに捧げたいと思います。

さて、語感に拘る私には『放送人』
は『報道陣』に近い響きを連想します。
私は常々、報道というよりは『テレビ
番組の職人』を目指してきました。地
域で人の営みを、じっくり見せてもら
い、感じたことをメッセージにして紡
ぎ出す。その表現は、研ぎ澄ませば、
地域という枠、そして時代を超越する
可能性を持っていると信じてきました。
長くかかりましたが、今回の番組は、
その確信めいたものをくれました。そ
して『放送人グランプリ』は、地方の
一制作者の私に、大きな励みとなりま
した。

最後に、放送人…『職人』的語感が

ら、私には「ほうそうにん」と読み方
がしつくり来ます。スタッフには、ま
だまだ真つ赤な顔で、フーフーとボー
ルを吹いてもらうことになりませんが、
テレビ番組を作る職人魂を大切にしてい
きたいと思えます。放送人の会の
皆様様。感謝の合掌。

有難うございました

元NHK 松平 定知



この度は「放送人グランプリ・特別賞」
にご推挙頂き有難うございました。

受賞対象に「ラジオ深夜便・藤沢周平
を読む」が入っていたことが、とりわけ嬉
しいことでした。私が「モーニングワイド
（現・おはよう日本）」を担当していたころ
ですから、もう、かれこれ二十年ほど前の
こと、昨今のような「周平ブーム」の「かけ
ら」も無い、そんな時代から、私は、音楽、
効果音、擬音一切無し、私の声と間
（ま）と息遣いだけで、あの「藤沢ワール
ド」を現出させたいという、恐れを知らな
い、身分不相応な提案を書き続けてきま
した。それが十年以上ボツにされ続けて、
やっとGOサインが出た時は嬉しかったで
すが、今回のそれはそれに次ぐものです。何せ、

「ラジオの、火曜日の、午前零時半、頃の放送ですから、その評判は世間に伝わり難いというのが実情です。ですから、老ディレクターと老アナウンサーは、そんな「世間様からの良い評判」などテンから考えずに、只管「玄人のお耳に耐えうる作品を」と念じて、毎回の収録にあたっていました。だから、大変嬉しゅうございます。「ちゃんと聞いて下さる方はいらつしやる」ということを肝に銘じて、然し、今後も、その制作スタンスは何も変えることなく、これまで通り、淡々とやっております。

「その時歴史が動いた」も、大変有難い話です。実は、この番組は始まって九年目なのですが、そして、それなりの評価も頂いているのですが、なぜか「賞」に縁がなかった。三年前に、名譽なことに「橋田須賀子賞」を頂きましたが、その時の受賞スピーチで、「光栄です。NHK会長賞は貰ったことがあるけれど、NHK以外でこの番組が賞を頂くのはこれが初めてなんです」と申しました時の、「当然、もう、何か貰っていると」思い込んで、殊更、推薦しなかったんじゃないですか」という反応に、苦笑したことがあります。

これは東京で制作している番組ではありません。大阪で作っています。地方局が作る、という事はどういうことかというところ、それは例えば、ディレクター歴プロデューサー歴二十年、三十年という「大物」「手だれ」の手によるものではない、入局三年から十年くらいの若い連中が、経験則もノウハウもへったくれも無く、一日中駆けずり回って、一本一本、試行錯誤を繰り返しながら文字通り「懸命」に作っている番組だということです。今回は、彼らのお蔭で戴いたようなもの。そんな彼らに思う時、厚かましい話ですが、近いうちに是非、「番組そのものに賞を」と、願ひする次第です。

有難うございました。

「激流中国」受賞の感想

NHK 角 英夫



この度は、素晴らしい賞をいただき、光栄に存じます。

中国の今を捉えるという仕事は、難関の連続でした。十三億のエネルギーが野に放たれ流れを作り、党の為政とぶつかる所で渦が巻き起こり、さらに超大国に向けた政策調整が新たなしびきをあげる……。そのすべてが、スピードも力も並み大抵ではない激流です。そのリアリティーを確保するために、NHKスペースシャトルの中国ドキュメンタリーが培ってきたノウハウを総動員してカメラを現場に入れました。シリーズですが、一本一本が独自のルート手法で対象に迫ったものです。一つの現場を徹底してウオッチするという手法は中国でもなかなか前例がないように、

ご覧頂いた中国人視聴者やテレビ関係者からも「現代社会で起きている構造を日本から教えてもらった」「なぜこれだけ中国人の内面に迫れるのか」といった声をたくさん頂きました。こうした印象を持ってもらえたのは、中国において、市井の人々が激動の渦中に生きるが故に主役として輝く時代になり始めたからだと思えます。一昔前のように海外メディアに対し建前どふるまうのではなく、むしろ一人でも多く目下の本音を聞いてもらいたいという姿勢を感じました。

私たちはそれをできるだけ忠実に記録すること、それがそのジャンルにおいて正しい問題設定なのかどうかを見極め、木を見て森を見ずにならないよう徹底的に取材すること。この二点を心がけたつもりです。

もう一つは、ステレオタイプとの戦いです。とかく日本では「中国に追い抜かれるぞ」という脅威論か、「まだまだだいたいしたことはない」と安心するか、そういう型にはめる理解の習慣が存在します。ナショナルイズムが惹起されるのもメディアの陥穽です。ディテールのドキュメンタリーを目指しつつ誘導的なストーリーになっていないかどうか日本人様式で問題を見ていないかなど自問の連続でした。

反省も多いのですが「中国を分かった気になつていたが、まだまだ自分は知らない」という感想も多く頂き、思いが通じた面もありました。格差の回では現状批判が込められたいたのですが、ある中国人から「親は子どものためにかくも頑張ってく

れるものなのか。涙が出て郷里の父親にすぐ電話した」という話も聞きました。日中ともに、国対国という構図を越えて、民衆対為政者とかメディアの姿勢に対する評価が視聴の基盤となり、ドキュメンタリーが目指す「思考を呼び覚ますこと」に少しはつながったのではと感じています。

賞を励みに新しい中国取材、新しいドキュメンタリーに挑戦していきたいとスタッフ一同、気持ちを新たにしています。

「三角山からこんにちわ!」

三角山放送局 木原くみこ



三角山放送局は、この四月で十周年を迎えました。ここまで来ることができたのは、見守ってくれた心の広いリスナーの皆様、懐の深いスポンサーの皆様、そして、百二十名を超える個性豊かな出演者たちのお蔭です。

三角山放送局の合言葉は「いっしょにねっ!」地域での共生がテーマです。障害者と、健常者がともに、ごく普通に話し合える「番組づくり」「場づくり」を目標にしてきました。開局当初から、「飛び出せ車椅子」電

自動車椅子のパーソナリテイ山本博子さん、「耳をすませば」網膜色素変成症で目が見えない福田浩三さんなど、身障者自身がレギュラーで番組を持ち、自分の考えを語り、それを地域の人が手助けすることにより、共生の輪が広がってきました。

しかしです、私たちは気がついていました。放送局が実は「バリアだらけ」なことを！

いまや、公共の建物ではユニバーサルデザインはあたりまえですが、残念ながら、放送機器はすべて健常者用にできているのが現実です。障害者用の放送機器というものが無いのです。障害者が、レギュラー番組のパーソナリテイを務めることも、放送機器を操作することも、念頭になかったのです。障害があっても、もっと自由に発信できるように、障害者の自立と尊厳を守るためにも、ハード面の充実がぜひとも必要なのです。

ということ、無いものは作るしかない！北海道工業試験場さんと共同で障害者用の放送機器を開発してしまいました。手が不自由なパーソナリテイが呼気でONできるカプスイッチ「エンジェルプレス」、目が見えないパーソナリテイに振動でキューを出す「ブルブルキュー」などなど。必要から生まれてきた機器が、日々活躍しています。

また、「飛び出せ共同作業所」という番組では、知的障害のある方もマイクの前で自分の思いを語ります。聞き取りにくいことばもありますが、聞く側がちよつと身を乗り出して、聞き耳を立てれば、解りあうことはできるのです。

地域とは、少数派で成り立っていると、私たちは考えます。「少数派を決して切り捨てない。小さな声、弱い声こそ大切に！」この思いを、けつして忘れずにいたいと思います。

三角山放送局の朝は、三角山山頂からの生中継でスタートします。

標高311メートル、雨の日も雪の日も登り続けて十年間、三角山愛好サークルの方たちです。夏場でも四十分はかかるけつこうきつい山ですが、吹雪のときは、中腹に作ったイグルーに避難しながらも放送を続けてくれました。

継続は力なり。頑張ります！

「集団自決」を取材して

琉球放送・野沢周平

この度は、放送人グランプリ2008奨励賞という荣誉ある賞を頂き、非常に感激しております。

制作しました「揺さぶられる歴史」教科書検定をめぐる「は、沖縄戦



での「集団自決」をめぐるものです。「集団自決」は住民が身内同士で殺し合った悲惨な出来事で、底には、「アメリカ軍に捕まるなら深く死ぬ」という日本軍の強制があったとされてきました。

しかし、文部科学省は教科書検定で、「集団自決」の記述に、「誤解するおそれがある」との意見を付し、教科書会社は軍の関与に関する記述を削除することに決めたのです。

取材は、検定が明らかになると同時に始まりました。体験者の証言を集めるとともに、大規模な県民大会にまでつながっていく抗議運動を追いかけました。また、「集団自決」の起きた座間味島に何度も足を運びました。島には、59人が命を絶つた場所、自決の起きた壕、住民が自決しに集まった忠魂碑など、「集団自決」を伝える様々なものが残されていました。しかし、身内を殺めた話は、島でも公然とは話されず、そつとしてほしいという気持ちからか、インタビューを断られることも多く、証言を集めるのには苦労しました。そんな中でも「集団自決」の背景に軍の命令、強制があったと話してくれた体験者の方もあり、戦後60年余りが経過

した今、再びこの問題がいかに体験者の心を傷つけているかを改めて感じました。

検定の背景を探り、伝えなければならぬ。そのため、東京の取材も重要で、検定に携わった検定審議委員、検定意見の根拠に挙げられた学術書の執筆者、新しい歴史教科書をつくる会などにインタビューしました。番組で検定の背景にある「軍隊の悪いイメージを消す」という、有事法制などと連動した動きを伝えられたのは、意義を感じているところです。

抗議運動の末、教科書には当時の軍の指導の影響は記述されたものの、政府への抗議行動は続けられています。

検定の根拠のひとつとなった大江・岩波集団自決訴訟（元隊長らが集団自決が隊長命令によるものであるかのように書いてある本の記述は誤りだとして、大江健三郎氏らを相手に出版差し止めなどを求めた）も、原告の訴え棄却という判断が下りました。今後、教科書問題がどのように展開していくのか、取材を続けたいと思います。このたびは誠にありがとうございました。

沖縄戦の追体験

琉球朝日放送 島袋 夏子

「私は殺意なき殺人者、殺したという実感はないが、結果としては殺人者



だ」。去年夏、初めて集団自決で生き残った男性の証言を聞いた。男性は16歳のとき、母親と幼い弟妹に手をかけた。なぜ自分だけ生き延びてしまったのか、後悔と罪悪感が薄らぐ日はない。「生き残った者の役割は歴史を正しく伝えること」。そんな使命感に支えられ男性は戦後を生きてきた。それなのに、一昨年文科省が発表した教科書検定意見は、集団自決の責任を彼らに擦り付け、その後の人生すら否定するものだった。

文科省は教科書の集団自決の記述から「日本軍の強制」を削除する理由をこう説明する。「教科書検定意見は専門家たちが議論を重ねて出したもの」。しかしそんな実態はない。戦争体験者たちの声を積み上げ、真実としてきた歴史認識を、こんな風に安易に変えることが許されるのか、生き残った人たちが再び絶望の淵に陥れ、罪悪感を背負わせたまま死なせることになってしまふ、そんな思いから取材を始めた。

しかしいざ始めてみると自分の沖縄戦に関する認識の浅さを思い知る。戦争とは、事実を捻じ曲げることは何を意味するのか・・・。

9月に開かれた教科書検定意見の撤回を求める県民大会。焼けるような暑さの中、主催者発表で11万人とも言われる人が集まった。声を上げる戦争体験者たちの傍らで静かに話を聞く戦後生まれの参加者たち。彼らの姿が、空回りする私を勇気づけた。個人主義と言われる社会にあつて、こんなにも多くの人が戦争体験者の痛みに寄り添おうとしている・・・、驚きとともにほつとした自分がいた。

平和な世の中しか知らない世代が戦争体験者の受けた悲しみや彼らの戦後の日々思いを馳せることは難しい。しかし彼らの言葉を聞き、他者の痛みに鈍感にならないよう自分を戒め、愚直に取材を続けていくことでしか、彼らの痛みに近づくことはできないのだと思う。何度も繰り返し取材に協力してくださった戦争体験者や教科書執筆者の方々に心からお礼を言いたい。ありがとう。ございました。

仕事好きの父



村木 高志

父が他界して4カ月になりますが、その間多くの方に父の思い出話、仕事の話をお伺いしました。生きていたころより父の存在

感は大きくなりました。

父は仕事が好き、仕事一筋でした。昨年夏に入院し、入院後も外泊許可をとって北海道で講演したりしました。病院にビデオデッキを持ち込み「地方の時代映像祭」の番組を見ていましたし、客とも仕事の話ばかりしていました。最後まで死ぬつもりは全くなかつたらうと思います。そんな父を誇りに思います。

父が誇りにしていた「放送人の会」と「放送人グランプリ」を体感できてほんとうにありがとうございました。
(故村木良彦氏長男)

放送人賞

今野 勉

放送人賞が今回設けられた経緯については、村木さんのあとを引きうけて放送人グランプリの運営にあたった堀川とんごうさんが、別項で報告されるので省略して、放送人としての村木良彦さんを考えてみたい。(以下敬称略)

村木の放送人としての生涯を考えると、運命とは皮肉なものだ、と思わざるをえない。

非制作現場へ配転された村木がTBSを退社してひとりのフリーのディレクターとして生きていこうと決意した背景には、その頃、村木あてに、CMやビデオの演出依頼がひんばんに来ていたという事情が

ある。フリーのディレクターになっても何とか生活していけるという見通しがついていたのである。

そのままいけば、村木はCMディレクターや映画の監督への道を歩んでいたかもしれない。放送人というより映像作家の道である。

僚友吉川正澄が集団退社と制作集団の創立を村木に提案し、村木がそれに乗つて、テレビマンユニオンの創立となったのち、村木は、いちディレクターの道ではなく、組織のオルガナイザーの道を否応なく歩かざるをえなくなった。

テレビマンユニオンの代表取締役社長をはじめとして、テレビマンユニオンのあとを追って設立された何十社もの制作会社を束ねてのATP(全日本テレビ番組制作者連盟)の創立と自らの理事長就任、ハイビジョン映像を開拓するためのトゥデザイン・ド・トゥモロウ社の設立と代表就任、未来的なニュース放送局を目指したMXテレビのゼネラル・プロデューサー就任、そして地方局のドキュメンタリストに光をあてることを使命とした地方の時代映像祭のプロデューサー就任――。

いちディレクターを目指して退社したはずの村木は、こうした組織のオルガナイザーとして抜群の能力を発揮した。そのオルガナイザープロデューサーの人生が、自ずと、放送人の人生になった。

村木自身は、自らの人生の皮肉をどう感じていたか、聞き逃したが、放送人としての誇りを最後まで持ち続けていたことは確かである。

南船 北馬

仙台だより 木村 成忠

二年前、東北放送東京支社長の任を終え仙台の本社に戻りましたが、昨年四月に東北放送の子会社TBCビジョンの社長に就任しました。

伊達政宗の靈廟「瑞鳳殿」の参道、広瀬川河畔、今はケヤキの若緑が美しい青葉通り。これが拙宅からオフィスまでの徒歩通勤ルートの名所です。朝道々での深呼吸が宿酔解消にきわめて有効であることを実感しております。

小社ではラジオ・テレビの番組・CM制作も稼ぎのタネですが、ラジオのCM制作では月々の受注件数で地元局の景況が推測できます。このところ前年比で三割近い落ち込みが続き、出口のないトンネルに入ったのかというのが正直な印象です。他のローカル局も似たような状況とか。ラジオ局の呻吟が聞こえてきます。

一方、元気なのが仙台にフランチャイズを置いて四年目になるプロ野球R球団のサポーターたち。とかく落胆させられることが多いはずなのに辛抱強

く優しく応援する姿は感動的でさえあります。四月某日TBCテレビでG帯の枠をローカル単で野球中継に差し替えたところ、なんと二十パーセントの視聴率を獲得。他局ですが、その前日の巨人戦は六パーセントでしたから、R球団が地元に着したのかなと思わせる出来事でした。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

友達テレビ 中山 和記

ゴールデンウィーク中、ぎっくり腰になり、活動停止を余儀なくされた。人間そうになると、全ての意欲を無くす。只、横になっている。我が家の犬も庭の方から入り込んできて、ご主人の傍で、横になる。一人と一匹が何するでなく、ボウとテレビを見ているのだ。

動けない人間は本を読むか、新聞を読むか、テレビをみるしかない。頭を使う本はこの状態では読む気にならない。新聞もすることがないから読むだけだ。腰が痛むのは初めてのことだから、こんなに大変であることは身にしてみる思いだ。何も出来ない中で、テレビだけは見ることが出来る。

そこで思う。テレビってのは果たして何なんだろう。と漠然と頭の回路が思い巡る。朝から晩まで、もう眺めている、といった感じだから、何を意識としてテレビを捉えるか、何て論議は難しい。しかし思うに、テレビなるものは、人にとって有難い友達なんじ

やあないかしらん。と、思う。

何故なら、自分の気分と意識で、相手はすべて自分に合わせてくれる。オンスイッチ一つで、切り替えられる関係だからだ。

だが、それは地上波だけでは友達にはなれない。BS、CS、ケーブルと一緒に話だ。逆に言えば、地上波だけでは心が満たされない。それは残念なことではないだろうか。ほんとは、面倒だからスイッチを他に一々変えたくはないのだが、どのテレビ局に入れても、皆が同じ風の番組編成だから、もつと違うドキュメンタリーとか、自然や動物やスポーツやドラマやらのぐぐつと来るものを見たくなくなるからだろう。

しかし、友達に全てを求めることは筋違いなのかもしれない。でも、やっぱ一人のひとが色んな世界観や考えを持っていてくれたら、その友を魅力的に思い、ずっと付き合っていたい、いつも会いたい友に思うに違いない。魅惑的な地上波のテレビをずっと待ち続けたい。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

サービス精神 山根 基世

NHKを定年退職して10ヶ月。今「サービス精神」とは何かということを考えている。NHK時代、良い番組、完成度の高い番組を作りたいということばかり考えていた。そのことが間違

이었다とは思わないが……。

退職後、「こどもの言葉を育てる社会貢献」を主な目的に、他のNHK退職アナウンサーと一緒に「LIPこどもの杜」を設立した。学校での授業など、こどもの「話し言葉」を育てるための活動を続けている。その一環として、これまでに3回、朗読会も開いた。初めての「入場料」を頂く体験。受信料と異なり、「今夜のこの朗読会」への「対価」としてのお金を頂戴するのだ。こうなると、代金分お客様を楽しませ、満足して帰って頂くにはどうすれば良いかを必死で考える。このとき初めて、NHK時代の私には「サービス精神」というものが欠けていたことに気づき愕然としたのである。

だが、それでは「鬼面人を驚かす」ような演出を人は喜ぶのか？人は何を「面白い」と感じるのか？「サービス精神」について考えるということは、「人間とは何かを考える」ことだと、遅ればせながら気づく。そして、それは今、放送界全体に求められていることのようにも、思える。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

テレビ映像論 北川 泰三

大学在職当時収集した放送映像資料の分類のため今も大学へ出向いている。「天安門事件」「コソボ紛争」「9・11テロ」等々の中継映像は今も鮮烈で、人間と生命の尊厳を強く訴えている。

これに対して、戦後の平和と繁栄を支えてきた日本の高齢者が今になって「死ぬというのか！」と怒っている。

事の起こりは3年前の郵政解散にある。「私は自民党をぶっこわす」「反対勢力は与党といえど許さない」「郵政改革の信を直接国民に問いたい」との小泉首相(当時)のかっこいい改革宣言に、マスコミも「刺客」だ「落下傘」だと大騒ぎし、特にテレビは「郵政反対派と刺客」の対立を「小泉劇場」と称して連日面白可笑しく報道するに及んで、小泉改革の本質が理解されないまま、改革歓迎ムードで選挙に突入した。結果は、小泉人気の自民党が圧勝。圧倒的多数を占めた与党が余勢で次々と改革法案を成立させたが、肝心の国民は選挙の過激報道で感覚が麻痺して法案には無関心。しかし3年経ってその改革が出てきて大騒ぎになった。

拙著『新版テレビ映像論』(2000・比叡書房)の第8章「ニュースの娯楽化がもたらすもの」で、私は「テレビのワイドショーがニュース・出来事を興味本位に娯楽化して伝えると、人々は面白がり視聴率は上がるが、物事の本質がわからなくなり、政治、経済といった複雑な問題への関心を失わせる」と説いた。今その複雑な問題「後期高齢者医療制度」が突き付けられている。来年は私も後期高齢者の仲間入りをする。長寿高齢者と持ち上げられてもうれしくない。困ったことだ。

(2008・4・28記)

ニュース雑感 富永 卓二

二〇〇八年、愛すべきニッポン国はどうなってしまったのでしょうか。

『イージス艦衝突事故』国民を守る筈だった軍艦が漁船を真つ二つ。乗組員二人を見殺し。遺体は未だ不明。

『自衛官殺人事件』陸上でも民間人を護るどころか殺人犯罪。沖縄の旧日本軍も島民を護らなかつた歴史あり。——だから自衛隊不要、米軍基地撤廃と前から言っているのだ。

『石原銀行四〇〇億追加』確かな再建計画無くして多額の税金を注入。泥棒に追い銭とはこの事か。教育、医療にまわせばどれだけ有効か。それほど面子に拘って続けたければ己の原稿料でも注ぎこんでくれ。誰も文句は言いませんまい。

『プリンスホテル日教組拒否事件』会場使用を拒み宿泊客予約をも取り消す暴挙。裁判所命令を無視。トップは客に謝罪もせず。これが日本の代表的ホテルの経営者なのだ。

『イラク派兵違憲問題』武装兵員の空輸は憲法九条違反という高裁判決に「そんなの(九条)関係ねえ」と無視する自衛隊高官と「問題ないと思う」福田首相。今やニッポンは非法治国家となり果てり。嗚呼。——さて我等、放送人として何を為すべきなのでしょう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

蔵書整理 田中 直人

このほど会の末席に加えていただくことになりました。よろしくお願い申し上げます。

GWを利用して蔵書の整理をしました。十年間一度も再読しなかつた本を選び分け、段ボール三箱ほど、ブックオフの出張買取に引き取ってもらいました。いつかひよつとしたら必要になるんじゃないかと、モラトリアム残留していた本たちのリストラでした。

ところがこの大虐殺をしぶとく生き延びた本もあります。「戦後代表シナリオ集」。昭和三十年、三笠書房刊、定価380圓。私が十代の頃、黒澤明の「野良犬」と「素晴らしき日曜日」が読みたくて、東中野の古書店で購入した古本です。あれから四十年。いよいよオサラバの時かと手にとってみたら、「手をつなぐ子等」、「生きている畫像」、「或る夜の殿様」など、今では滅多にお目にかかれぬ珍品が目に入りました。で、ついつい読み始めてしまったら、その面白いこと、多彩なこと、物語自体もそうですが、スタイルも個性的に違います。伊丹万作は時々ト書きに台詞を書き、小國英雄のト書きはいつの間にか小説になっている。それぞれの自由さは眩しいほどでした。そんなわけでこの本、私の書齋でまともや最長老として君臨することになりました。私が今、つまらぬシナリオをひねり始めたのも、そのせいです。

(テレビマンユニオン)

グランプリ贈賞式パーティーより



木原くみこ氏 中澤忠正氏



島袋夏子氏 斎明寺以玖子氏 山路家子氏



萩野靖乃氏 角英夫氏 桜井均氏

☆ 新刊紹介

『NHKと共に七〇年』
わが回想の九〇年

長澤泰治著



『人と会うは幸せ！』
わが「芸界秘録」五〇

嶋田親一著



『全国テレビドキュメンタリー』
資料編 全3巻 (01年〜06年)
責任編集 田原茂行 鈴木典之
(セット価格 54000円 大空社刊)

さきに『全国テレビドキュメンタリー』

107年』が出版され、この3巻は21世紀からの6年間の、NHK、民放を横断するクロニクルである。

(1) 地方局制作から優れた作品を選び内容紹介と論評かねた連載コラム「クローズアップ! 地域発信番組」(「月刊放送ジャーナル」)を網羅。

(2) ドキュメンタリー台本(月刊「放送ジャーナル」)をタテ組原版に忠実に再現し、台本の視覚から作品の骨格や背景を探る。

(3) 放送文化基金賞、ギャラクシー賞、「地方の時代」映像祭賞、日本民間放送連盟賞、芸術祭賞など受賞作品など放送界の各賞をすべて紹介。

(4) 今見られるドキュメンタリー作品リスト(川崎市市民ミュージアム所蔵作品より)例 「地方の時代」映像祭作品、牛山純一氏TVドキュメンタリー映像コレクションなど。

(5) 放送文化基金賞番組部門テレビドキュメンタリー番組受賞一覧(第1回 1975年〜第33回 20007年まで)付 放送批評懇談会作成「ドキュメンタリー番組の系譜」

以上の資料内容で、テレビドキュメンタリーの巨大な山脈の道標となっている。その昔、塙保己一が日本の古典を紹介した『群書類従』に比肩すべき労作である。国公立、市民図書館、大学の資料蔵書として、また制作現場での企画資料として各局、プロダクション必携の資料大観であろう。田原、鈴木両氏の地道な努力を讃えたい。(M)

1915年(大正4)生まれ93歳、
矍鑠である。ミスターNHKともドントもゴッドファーザーともいわれた。

36年(昭和11年)入局。まず経理部で裏方の仕事、そして入営。ノモンハン事件参加。除隊、復職後報道畑へ。円盤式録音機を車にのせ取材。太平洋戦争直前陸軍宣伝班員、開戦でシンガポールへ。社会部長の戦後から始まった新生NHKで「街頭録音」「放送討論会」「尋ね人」など聴取者参加型の番組を開発。以後芸能局長時代に五社協定の包囲網の中で大河ドラマを創設、娯楽面でも放送主導時代の幕開けを。専務理事時代は人事や長期計画など放送経営に。当然内部から自前の次期会長候補に推されるが「私は雑草人生こそふさわしい」と固辞、以後NHK交響楽団など関連業務に徹した。この人を抜きにして今日のNHK、いや放送文化は語れない。

膨大な長澤語録をまとめた佐々木欽三氏(会員)の労を讃えたい。(M)

藤原書店刊 2000円

現日本演劇協会常務理事。ワセダの演劇部学生時代から若くして新國劇の文芸部。途中、出来たてのニッポン放送を経てフジテレビ開局。移籍しドラマ部へ……。後に長く放送批評懇談会の専務理事。だったらクソ面白くもない建前批評ではない、業界の裏事情からナンボでも書ける立場なのにシヤイというカイキというか、それはしない。

この本も母校(秋田県立中央高)の卒業生雑誌に請われるままに書いたエッセーがたまり溜まって。

話上手が語るエピソードがそのマンガ活字になったような面白さ。誰でもが気軽に、〇〇ちゃんとチャン呼ばわりで付き合えた「人と会うは幸せ！」の頃の、あの顔、あの声……。シマちゃんプロデューサーで作られた傑作が『6羽のかもめ』なら、この書はさしずめ『50羽のかもめ』だろう。底流にモノ作り、ドラマ作りの思いが原点が泛んでくる。おもしろい。

清流社刊 1800円

(松)

グランプリ贈賞式パーティーより



松尾羊一氏 荻野慶人氏



大山勝美氏 後藤和晃氏 遠藤利男氏 小中陽太郎氏 野沢周平氏



松平定知氏 河野尚行氏

わがAD時代

西川 章

昭和40年、私はTBSに入社するとすぐ演出部に配属されドラマのADになった。TBSテレビが始まって10年、さすがに生放送のドラマはなくなっていた(一本だけその日撮ったVTRを流しながらやる半分生の30分ドラマはあった)が、VTR収録のドラマは多かった。この当時はまだモノクロでカラーになるのは数年後のことだ。

「日曜劇場」「七人の孫」「七人の刑事」「ただいま十一人」などの60分ドラマがあり、30分の連続ドラマも多かった。

当時のADの仕事は多岐にわたっていた。ゲスト出演者のキャスティング、そして出演者等のギャラを切ること(これらは今ならプロデューサーやAPの仕事だが、そのころは石井ふく子さん以外に専門職のプロデューサーはいなかった)、リハール、本番のスケジュール作成、VTR編集、音楽の録音、後にMAと呼ばれるようになる音楽や効果音のダビング作業、担当番組のオンエア指揮等々。そして何といつてもADの仕事のメインはスタジオでの本番作業だ。

当時60分ドラマは朝10時のドライリハールから始まって、夜12時すなわち24時には終わるのを原則としていた。「七人の孫」や「ただいま十一人」などのホームドラマは何とかこの時間内に終わることが出来たが、事件ものの「七人の刑事」やちよつと後に始まった「真田幸村」などの時代劇はとて24時には終わらない。

会社からは24時に終れといわれ、公式には24時終りのスケジュール表がスタジオ入口に貼り出され、当日台本の背表紙にも印刷されているが、ポケットには秘かに26時終了のスケジュール表を持っていた。26時に終れば翌日の番組のセットの建込みも、朝10時のスタジオ開始にもぎりぎり間に合う。しかし26時を過ぎて明け方までかかることもしばしばだった。そうなる翌日の番組の作業開始は遅らざるを得ない。そしてその番組の終了も遅くなって更に次の日の作業に影響を与える。こうした「雪崩現象」がしばしば起こった。

だから我々ADの最大の仕事は収録を早く終わらせることだった。そのためには照明直しの作業を督促し、その合間に次のシーンの小道具や消えものの準備をチェックし、次のシーンの俳優に衣装化粧の準備を促し、一刻も早くスタジオ作業を終えるべく努力したものだ。

そうして疲れ果ててスタジオの作業を終えるのだが、その後また飲みに行く元気が残っていたから不思議だ。

第八回放送人句会

◇平成二十年五月二十一日(水) ◇於：麦屋

出席：石橋冠(選のみ)、伊藤視郎、新村もとを、

□ 橋本きよし、松尾馬笑、西川阿舟

◇不在投句：大山勝美、中村フミ、山県ぼん太

◇兼題：鯉幟、筍、ピーカン

ピーカンや自転車でくる氷菓売

ぼん太(◎冠、◎き、視、馬、舟)

筍の伸びる音して月出でぬ

もとを(◎視、舟)

鯉のぼり信濃は青き山連ね

ぼん太(◎も、き、舟)

はじめの筍めしや陰膳に

勝美(◎馬)

鯉のぼり大漁旗をしたがえて

勝美(◎舟)

年ふるや筍筍で泳ぐ鯉幟

馬笑(冠、も)

妻と喰う筍めしも旅の夕

ぼん太(冠、馬)

鯉幟メタバになりて遊々と

フミ(冠、馬)

筍や七日見ぬ間に青七才

勝美(冠)

ピーカンの昼弁当は古茶が付き

フミ(冠)

村荒れて筍伸びるまゝなりし

阿舟(冠、視、も、馬)

筍飯少し焦がして炊き上がる

阿舟(視、も)

ピーカンや馳ける雑兵汗まみれ

きよし(視、馬、舟)

ぼろぼろと筍掘りへ山の鳩

ぼん太(視)

ピーカンで風の上州こいのぼり

もとを(視)

ご近所は有難き哉若竹煮

馬笑(も)

鯉のぼり風は海から吹いてくる

視郎(も、き、舟)

四万十を遡るや千の鯉幟

阿舟(も)

ピーカンのロケとやならん朝曇

阿舟(き)

ピーカンに新樹一寸伸びるかな

フミ(き、馬)

ピーカンの富士青々と夏に入る

もとを(き)

ピーカンやパラソル林立台場ロケ

勝美(き)

ピーカンやレフ撥ねかえず雲の峰

きよし(舟)

★次回・七月十六日、水、午後六時半、於・麦屋

兼題・汗、泳ぎ、台本(夏の季語を入れて)



《大山勝美 人と作品》

司会・今野 勉

時代を画した放送人をめぐり、作品群十対談構成で今野勉がナビゲートする『放送人の世界』。今回はテレビドラマの自立を模索し続けた大山勝美の全体像を引き出す3回シリーズ。

2月9日の上映作品

『ビルビリリは歌う』（62年）

『若もの 努の場合』（62年）

2月16日の上映作品

『わが愛』（73年）

『ふぞろいの林檎たち』（83年）

3月1日の上映作品

『蔵』（95年）

『天国までの百マイル』（01年）

まず60年安保前後テレビが文学や演劇、映画や音楽など他ジャンルとの交流と模索の創成期の実験時代の作品から、例えば『ビルビリリ…』。サラリーマンの職場をミュージカル的手法で捉えた管理社会への風刺性は、話題の『サラリーマンNEO』（NHK）を先取りしている。『努の場合』も、若い労働者をめぐる事件から資本と組合の論理が同根である皮肉を抽出、自立の思考を求めるドラマで、今見ても新鮮に映る。大山はその後江上照彦や山田太一らと米国テレビドラマを研究、日常性の劇化と深化というテレビ的な手法、

例えば漱石の世界を日常レベルに組みなおした『わが愛』、パディ・チャイエフスキー「独身送別会」をヒントに『ふぞろいの…』に等身大の青春群像を描いて大きな反響を得た。

フリー演出家になって『蔵』など宮尾富美子3部作や、浅田次郎の『天国まで…』をつくる裏事情にふれる。

絶えず「テレビ的とはなにか」の目線から長い実作活動を中軸に置きつつ、テレビ文化の大衆性から芸術性のあるあり様を模索し続けている人である。

（著作『テレビの時間』に詳しい）
いわば大山式広角打法によるドラマ自叙伝といった赴きで、3回とも満員の盛況であった。（記・松尾羊一）

人気番組メモリー

「8時だよ！全員集合」

2月23日（土）午後1時半～4時半

横浜情文ホール

ゲスト 高木ブー（出演）豊原隆太郎

（演出）山田満郎（美術）

司会 大山勝美

ステージに高木ブーは杖をついて登場した。アキレス腱を切った後遺症のようだが、これは「8時だよ！全員集合」での事故ではない。「8時だよ！…」



高木ブー氏

では不思議なくらい怪我がなかった。美術の山田満郎は「本番やつ

ていた時は、安全には絶対の自信を持っていましたが、このイベントのためにVTRを見直してみても驚きました。見ながらはらはらしました。よくやっていたものですね。怪我がなかったのは奇跡です」と言う。



山田満郎氏

あのステージでは自動車も飛んだ。美術スタッフは仕掛けの道具係りも入れて総勢50名。ADは8名。ADだけでは人手が足りず、例えばコーラスのきっかけ出しなど美術スタッフが手伝った。早変わりには3人がかり、まさに戦場だった。

山田満郎は横浜のステージにセットのミニチュアを持ち込み、カメラで撮影して会場の大きな映像で怪物マックスにごろごろ転がされる家の仕組みを説明した。このイベントならではのやり方である。

「全員集合…」の本番は土曜日だが、打ち合わせは木曜日に始まる。豊原「木曜に構成作家のたとえば田村さんと一緒に構成台本を持って打ち合わせに行く。いかりやは難しい顔で読んで、僕には顔を向けられないで構成作家に『これ面白い？』と聞く。それから暗い地獄の数

時間が始まる。」高木「ボクはネタは出しませんでした。加藤茶



豊原隆太郎氏

や志村がネタを出していかりやが気に入ると『それ買った』になるのですが、いかりやの難しい顔を見るといやになった。付き合っているといかりや病になって唇が腫れる、とよく言ったものです」

土曜日の現場は午前10時に始まる。本番の午後8時までにドライ、カメラハ、ランスルーと三回りハースルを重ねる。全部、中継、生放送。カメラは中央に4台、上手にも下手にも置かなかった。両サイドからのアップの映像は必要なかった。

会場の前には朝早くからおじいちゃん、おばあちゃん並び、それからお母さんが並び、学校が終わると子供たちが並んだ。開場は1時間前くらいで、本番の30分前から客席を楽ませた高木「子供たちの反応が大きければ『うまくいった！』と嬉しかったものです。探検ものではたかがぬいぐるみなのに子供たちはドキドキしている。5, 4, 3, 2, 1から『オッス！』でいかりやは完全に客の心を掴んでいました。」話が始めると次々にエピソードが出てくる。「停電」「火事」「競馬のノミ行為」の三大事件。三大コントは「学校」「会社」「家庭」。予算が足りなくなるプロデューサーは編成とかけあって予算をとってきた…等々。とても書き切れない。

とにかくこのイベントは生本番一回限り、再放送なし。皆さん見逃さないください。（記・伊藤雅浩）

ラジオからみた『グランプリ』考

石井 彰

どうやら放送人の会の皆さんはふだん、あまりラジオを聴いていないようだ。それが証拠に、今回の放送人グランプリへ、ラジオ番組や制作者へのノミネートは、とても少なかった。

放送人グランプリの選考は、ラジオとテレビが一緒に行われる。となると数の上で、どうしてもラジオには光があたりにくい。事実、私が選考委員に加わる第5回まで、グランプリはもちろんのこと、特別賞にすらラジオ関係からの受賞者は一人もいなかった。

そこをなんとかするために、きつとラジオの仕事をしている私が選考委員に指名されたのだと思っているが、力不足は否めない。そのうえノミネートすら少ないとなると、選考会での迫力はどうしても小さくなってしまふ。

第5回で、ようやく琉球放送のラジオオパリー上原直彦さんがグランプリを受賞。第6回では、長崎放送が特別賞を受賞された。もっとも伊藤藤さんの場合はラジオの活躍だけでなく、退職後も続けられている被爆者の証言採集の執念が贈賞理由だった。

さて今回の放送人グランプリで、ラジオはどうだったのか？ノミネートされたのは以下6件7人だった。

○ラジオドキュメンタリー『われら愛す〜国歌・国民歌についての考察』

で芸術祭大賞を受賞した山形放送の高橋俊治ディレクター。

○ラジオドラマ『プラットフォーム』で芸術祭優秀賞を受賞した、東北放送の北阪昌人さん。

○ラジオドキュメンタリー『山の声』で民間放送連盟賞最優秀賞を受賞した青森放送の須藤善夫ディレクター。

○NHKで森鷗外の作品を朗読してきた文学座の今井朋彦さん。

○TBSラジオの人気ワイド『森本毅郎スタンバイ!』の森本毅郎さんと制作スタッフ。

○札幌でコミュニティ放送を運営しながら、出演する視覚・身体障害者用の放送機器を開発した「三角山放送局」の木原くみこさん。

最終的には木原さんが特別賞を受賞した。放送ではバリアフリーと言いなから健常者向けにしか作られない放送機器（マイクカフ・キューランプ）を障害者向けに開発したという、地道だが大切な活動が評価された。

また特別賞を受賞した松平定知アナウンサーの受賞理由には、テレビの活躍だけでなく、ラジオ『深夜便』での藤沢周平作品にみる朗読が高く評価されたことも付記しておきたい。

放送界では番組を作ることに重きが置かれがちだが、放送を通してどのような社会を実現していくのかにも目を配っていただきたい。

ところがあまり目立たない地道な活動には、なかなか光が当たらない。放

送人グランプリは、番組よりも制作者個人やスタッフの活動と業績に力点を置いて選考が行われてきた。その精神をこれからも大切にしていきたい。

ラジオは、毎日がお祭り騒ぎのテレビと比べれば、地味で日常的なメディアだ。『暮らしのとなりにある』といってもいい。それゆえ目立ちにくい。

せひ会員の皆さんには日ごろもっとラジオを聴いていただき、日常のなかにあるキラリと光るラジオのすばらしさを見つけていただきたい。そうすれば来年のノミネートがもっと増え、選考が豊かになるはずだ。

◆◆◆◆◆

第5回「放送の緊迫」を語り合う会

～受信料問題を考える～

石井清司

今、東京地方裁判所で、「受信料の支払いを拒んだ三人の市民」が、NHKを原告として法的に裁かれようとしている。「愛されるNHK、みなさまのNHK」を掲げてきたNHKはなぜ国の司法に依ってまで強権的に視聴者に臨んでくるようになったのだろうか？と少しげんなりした。

訴えられた三人は三様に理由はあるらしいが、要は「今のようなNHKには受信料は払いたくない」という素朴な意思表示のようなのだ。

こういうやり方でなく市民にNHKをよりよく理解してもらい、受信料も

進んで払ってもらえるような努力や考へ方はないものだろうか、など一市民としても放送人としてもとても気になる。それともこれまでいろいろあり過ぎてNHKの考え方そのものが何だかすっきり変わってしまったような気もする。仮にNHKが法的に正しくても、「文化と生活と報道のNHK」は警察官の権力行使やサラ金の取立てとは少し違うのだから。

という訳で、題して「NHK受信料督促裁判の余韻をよく見てみよう」とした。NHKと自動的に受信料契約の関係に入らされないためには、その場で、自分で受像機を壊さないとダメらしい。NHKに強圧的に迫られた未払いの人達は沢山いたが、この三人の被告の依頼で弁護士料無料で立ち上がったのが、お招きした梓澤和幸氏、日隅一雄氏ほか人権派で知られる弁護士のみなさん。両者が快く来てくれた。

「戦後、民主憲法のもとで生まれた放送法。そこにはNHKとの受信料契約については書いてない。憲法解釈で最高裁までやる」と梓澤氏。

いい機会だから「NHKとは」「放送と市民とは」など、今の放送のありかたで本当にいいのか。番組作りの放送現場を支えている放送局のありようそのものが政治意図や介入欲のもとで、今このように大きく揺れている。こういう問題が制作現場と決して無縁でないことがよく分かった。

巨大病院はサイボーグ工場

天野進平

(元「放送文化」編集長)

2年前、尿が出渋り失禁がはじまりその頻度があまりにも高くなってきたので介護タクシーで都心の巨大病院へ飛び込みました。時間外の外来患者でしたが脳卒中のマヒで既に車椅子ですから、白衣の医師が手をとって「どうしましたか?・・・」と。

まずはホッとしました。

ところが、私が症状を話しているのに彼は「聴いて」いない。ドラマ屋の私は、かつて役者の表情づくりもしてきましたからそれは態度でわかります。

私の話が終わるやいなや彼は言いました。「小便が出にくいことはわかった。しかしアンタ、そんな心配をしている場合じゃないよ。アンタが今している咳は普通じゃないぞ。オシッコの方はあと回し。これからアンタを呼吸器科へ送るからね」

ウムを言わせない口調に唾然としていると背の低い黒いタイヤの担架車がやってきて、あつという間に乗せられ長い廊下を走り、エレベーターに2度乗り、着いた「呼吸器内科病棟」で4人ベッドの一つに転がされました。

翌日になって、CTかMRITか、すくなくとも診療室に運ばれるものと考えたら突如として、恐竜のようなレントゲン車がベッドサイドにやってきたのです。

男女2人のドクターがごあいさつ。

男性医師は30代半ばで一見暴走族風、女医は30ちょい過ぎの美女。白衣の胸に下がった聴診器がステキなアクセサリーでした。「恐竜」をよく見ると、車体はブルドーザーですが、頭部がレントゲン撮影器になっています。当然X線技師も2人ついているのに、なぜか女医さんはアラれもなく恐竜の首にまたがっていました。

撮った写真を見せながら、彼女は説明してくれました。「この白濁しているのが膿。あなたの病気は誤嚥性肺炎で歯周病菌が左肺に入って炎症が起こり、そこから肺全体に膿がたまっています。一刻を争う状況です。それで私がさせてもらうのは、あなたの背中に穴を開け、胸の膿を抜き取るパイプラインを敷設することなのです」

あれ?、「敷設」って建設用語だよな。そうか、今の巨大病院には土木科もあるんだと驚いているうちに「掘削工事」がベッド上で始まりました。

なにしろ背中に穴を開ける工事だけにかかなりの痛みでしたが、なぜか麻酔医はおらず、「暴走族」が「痛いかな?いま麻酔の注射をしてやるからな」と言い、彼女は私の体を抑えつけながら「男はガマン」と何度も言いました。そのあとはベッド生活です。抜き取った膿は、初めはポリバケツにうけていましたが、まもなく銀色をした金属製の集膿器が枕の下に置かれました。

ポタポタポタ……。歌人・吉井勇なら祇園の宿で枕下にせせらぎを聞き、一首うたう風情です。でもそのほかの治療はありませんでした。

2か月経ったある日、呼吸器内科の医長が現れ、宣告されました。

「こうしていてもキリがない。膿の量も減ってきたから退院していいが、入退院を繰り返すことになるかもしれない」とおっしゃってから、思い出したように、「あ、そうそう、泌尿器科からそっちが終わったらこっちに戻してくれ、と言われていたんだ。そうだからあっちへ移ってください」

弱い患者は医師の言われたとおりにするしかありません。もと来た長い通路を、一瞬だけ滞在した泌尿器科病棟に戻り、私が「ただいま」と言うとき最初のドクターが、ややこわばった表情で「もう薬物治療の段階じゃない。人工排尿になるぞ」と宣告され、ここでも穴をあけられ、糞尿パックのある人生になってしまいました。

今度のオペは仰々しく大きな手術室で眩しいかぎりの无影灯の下で行われました。終わったあと「ついでに前立腺も削っておくよ」と言われ、ああそうか、尿の出渋りは前立腺だったのかと合点しました。

面食らったのは「人工排尿の工事には5種類あるが、アンタの好きなものを選べ」という言葉です。それで私は腹に穴を開ける迂回道路工事の方を選択しました。老いたりとはいえ、男のモニュメントに管を通す気持ちははなれませんか。

ペースメーカー、人工血管、人工骨人工呼吸器、人工皮膚など……。 「サイボーグ工場」はオーバーかもしませんが、私が体験させられたのは

病いのイメージではなく、肉体の土木工事の感じでした。現代医療は日進月歩で人体の「改造」をすすめていることは否定できません。でもこの病院では触診はもちろん、聴診器も当てられたことは一度もありません。

もはや、巨大病院からは「癒し」や「手当て」という、人間と人間のいなみとしての医療がしだいに影を潜めてゆく、と実感したのです。

それは医療者自身も感じておられること。例えば、映画『チーム・バチスタの栄光』の原作者で外科医でもある海堂尊ドクターも書いてます。

「精密機械製造工場と見まがうばかりの、最先端技術を誇る大学病院にそこまで求めるのは酷だ」

医師会や看護協会がよく講演をする友人によると「臨床」の語源であるラテン語の「クリニカス」とは、いまでも消えようとしている人間に寄り添い自己の人格を傾けて天国に送る神父の行為だったそうです。そして、海堂医師はこうも書いてます。

「巨大病院には、神様や仏さまが滞在するゆとりはとうに失われている」のであると。

(脚本家 要介護度3『社会医療ニュース』08年3月号より転載)

注1 天野さんは一九三〇年生まれ。都立大卒。戯曲・ラジオドラマ脚本(断崖「灰色の廊下」など)。70、80年代に雑誌「放送文化」編集長。当時は人間模様(NHK)や金曜ドラマ枠(TBS)芸術祭単発などドラマ高揚期で、その航跡を支え、療養中「脳卒中ジャーナリスト」を自称、長い闘病記「老いをはしゃぐ」をまとめ話題となった。

構成 久野浩平

今回紹介するのは、ラジオ創成期、あるいは音をモチーフに集めました。

最初は 坂倉孝一 さん。坂倉さんは一九四七年NHK入局、番組編成の仕事を経て四九年社会課に異動、「皆さんの健康」「産業の夕べ」など教養番組を担当します。「証言」は日放労の成立、占領下のCIEの検閲など興味深い問題にも触れますが、中心は五二年「日本の課題」から始まる「朝の訪問」「連続講話」「よもやま話」です。柳田國男、長谷川如是閑、永井荷風、谷崎潤一郎、小林秀雄、三笠宮、楠木清方、平塚雷鳥、イサム野口、柳原白蓮、花柳章太郎さんたちを講演形式で時に応じて対談形式で登場した文化人著名人は千人を超え、それぞれの思い出が印象深く語られます。下山国鉄総裁に出演依頼、直後に起こった下山事件の話題は時代を感じさせます。

「いろいろなインタビューしたものを一つのテーマでつなげて問題を提示するという形式、ま、録音構成の手法はその発展形式という気がします」

次は 杉山邦博 さん。杉山さんは北九州市小倉出身、双葉山全盛の幼年期からスポーツアナを志し、九州弁コンプレックスをバネにアクセント辞典を片時も手離さない努力の結果、五三年NHK入局、まず名古屋に赴任。「証言」は新聞記者からスカウトされた異色のスポーツアナ、当時のCK放送部長山本照さんの思い出。初めてのプロ野球中継は同年の中日・大洋、相撲は五四年名古屋場所のラジオ中継、五

年志村正順さんのテレビ拒否の波紋を受け、名古屋からの出張で両国国技館からのテレビ中継、五七年福岡へ移り大相撲九州場所の中継、全盛時代の西鉄ライオンズと出会います。六〇年AKに異動、四年後のオリンピック中継に参加、その後仕事の中心は次第に相撲に専門化して行きます。野球や相撲の架空実況放送を混じえた「証言」は飽きさせません。杉山さんが一番伝えようとしたのは、アナウンサーに最も必要なジャーナリストの眼だと……

「ラジオはね、主語が先に来なきゃいけないわけで『白鳳が上手を取りました』これは主語が白鳳。『白鳳が左上手を取りました』これもラジオです。『得意の上手をひいた白鳳』っていうのはテレビ的な放送ですよ。見ればわかるわけですから、両者が」

沖野 さんは五七年NHK入局、最初の任地は広島。芸能班四人でローカルの連続ドラマ二本、月一本の「ラジオ小劇場」それに邦楽、歌謡曲の番組をこなす忙しさでした。六〇年AKに異動、文芸部に属し舞台中継や「映画の時間」を担当します。「証言」ではその時代のラジオドラマ状況の概観和服を着て出社するディレクター、麻雀屋に入り浸りの先輩など、当時の文芸部の特異な雰囲気語ります。六一年中川忠彦さんのアシスタントで芸術祭参加作品、伊馬春部作「国の東」に加わり、ステレオドラマの魅力を体験し、音響効果やミキサー技術に深い関心をもちました。六七年水尾比呂志作「愛と修羅」を演出、イタリア賞を受賞します。話題は、企画の経緯、翻訳に適した力強い科白の創造、湯浅譲二さんと協力した音楽劇としての完成度

などの海外コンクール対策、さらにその後も作り続けたラジオドラマでのマイクフォンの選択、使い方など専門的演出技術にも及びます。

「ずうっと広い所に虫の音がして、ま、原っぱですね。で、少し寄って行くと、庭先で鳴いて、ああいい秋だなんて感じ、もっと寄って行くとその虫がこんな大きなお化けになって出てくるんですね。で、それを越えろと今度は、虫の声じゃなくなっちゃう、つまりヤスリの音になる、完全に。顕微鏡で見たときのあのギザギザ通り」

次ぎは 松尾羊一 さん。この会報の編集者松尾羊一さんは本名吉村育夫。五三年文化放送入社。番組送出運行班を経て社会報道部番組班へ。ダンスケ担いで『日本の子供』『マイクの広場』と録音構成一筋で過ごします。「証言」は先行したKR(現TBS)『ラジオスケッチ』『現代の十字路』など当時の録音構成番組の概括からはじまります。ラジオドラマを意識し、ナレに岸田今日子や渡辺美佐子など新進女優を起用、伴奏音楽も湯浅譲二や佐藤慶次郎などに委嘱したり、録音構成を幅広く表現ジャンルの方法論から探究。後に曜日別に手塚治虫、寺山修司、岡本太郎、秦豊などを迎えた生番組『キャスター』(朝七時から一時間)で大島渚を担当。明治百年企画(68年)で戊辰戦争、日清日露戦役生存者取材。話題は安部公房、中村真一郎、茨木のり子などにラジオドラマを依頼する単発作『現代劇場』で当時の「総合芸術」運動の機運に呼応した小川清、大坪都築、島地純など、テレビ以前の音声芸術の前衛性に踏み込んだ文化放送のラジオ黄金時代に及びます。

「デンスケをペン代わりに(中略)絵の無い録音構成は聞きづらい形式だが、あしたに総理、夕べにパンスケ取材、こんな面白い商売はない。「政治を風俗レベルで、風俗を政治的に語る」(大宅壮一)そんな時代でした」

最後は 織田晃之祐 さんです。織田さんは五〇年代後半からNHKで音響効果の仕事が続けてきました。もともとはグラフィックデザイナー志望だったといえます。織田さんを音響に目覚めさせたのは内村直也さんの小著作『ラジオドラマの話』の中の「音は美しい」という一言でした。「証言」では人との出会い、共作を通しての自身の成長の歴史です。六三年、芸術祭参加作品『鋳型』で演出の和田勉さんから「オリジナルの織田の音を吐き出せ」と言われ、音楽と効果音の融合を考えるようになります。七〇年代は佐々木昭一郎さんとの共作で六九年『マザー』、七一年『さすらい』、七四年『夢の少女』と続きます。七五年吉田直哉さんの『未来の遺産』に協力武満徹さんと出会い、シンセサイザーを知ります。CD再生機を持参して様々の音、音楽と共に語る「証言」は楽しい説得力があります。

「サウンドエフェクトを、ま、ベースにしながら、織田としてはですね、ミュージックエフェクトと(中略)一般的な音楽効果の中に音楽的要素を組み込んだ音響表現のポルテージを上げたかったです。それによって音響表現にかかわる人間の思いとか意図を少し強く打ち出して行ければ、という気がしましたよね」

日韓中テレビ制作者フォーラム
準備会議報告

九月二十四日から四日間福岡で開催される第八回日韓中テレビ制作者フォーラムの準備会議が、五月十七日と十八日、福岡市内のホテルで行われた。

出席者は、中国から中国テレビ芸術家協会の王鋒さん、王雪若さん、チョン・チンさんの三名、韓国からは第一回からこのフォーラムを築き上げてきたテレビ監督の鄭秀雄さん、韓国放送人協会長の章翰成さん、韓国放送プロデューサー連合会の梁承東さんと金榮希さんの四名、日本側からは今回の事務局の中心となる村上雅通さんと山田尚さん、それに東京から放送人の会の

大山、河野、寛、長沼が出席、福岡の民放各局やNHKプラネットの人達も参加して、通訳を入れると総勢二十人あまりの会合になった。

実質的な会議は、十八日午前十時から夕方の五時過ぎまでびっしり行われたが、冒頭日本と韓国の代表から四川大地震に対するお見舞いの言葉があり、中国の王鋒さんから「国民が一つになつて未曾有の災害を乗り越えたい」という力強い決意が述べられた。

続いて内容の検討に入り、これまでと同じように、作品視聴とテーマに沿ったシンポジウムをフォーラムの中心に据えることが確認されたが、テーマについては、三国の出席者に、今若者たちの価値観が急激に変化していると

いう共通認識があることが分かり、今回はこの若者の問題をテーマに取り上げることに決まった。

各国からの出品作品は、参加者が視聴し制作者と意見交換をする作品を中心にそれぞれ六作品とし、今回は四日間と会期も短いため、できるだけセレモニーを簡素化し、その分作品視聴や意見交換の時間を充実させようということ意見が一致した。

その中で特に今回の特色としては、参加作品について、これまでのジャンル別という枠をゆるくして内容本位で作品を決めること、表彰についても優れた作品を選ぶというコンテスト的色彩をもう少し強めようということが決められた。この問題については、議

論の過程で表彰の目的が交流がコンテントかで意見が分かれたが、最終的に真のコンテストは交流と矛盾しないということ意見がまとまった。

九月の本番は、中韓からそれぞれ三十五名、日本の参加者を入れると百二十名ほどの大会になる予定だが、会場となる「アクロス福岡」は、国際会議場もある福岡県の総合的な文化・情報施設で、街の中心の天神にあり、宿泊するホテルも目の前という、国際大会の会場としては申し分のない環境が揃っているように思われた。

会議のあとは全員が九州産の日本料理で会食、お互いに本番での充実したフォーラムの実現を約してこの準備会議を終わった。(記・長沼士朗)

2007年度決算会計報告と2008年度予算(一般会計・特別会計)が、5月16日の総会で承認されました。

2007年度(平成19年度)会計報告

(2007年4月1日～2008年3月31日) (単位:円)

1. 前年度繰越金	6,699,260
2. 2007年度収入	7,601,170
会費(含入会金)	2,070,000
共催事業契約・各種助成金	5,350,000
イベント関連収入	132,000
寄付・利息その他	49,170
3. 2007年度支出	6,038,784
一般管理費	2,526,513
(事務局経費、会報発行費、通信交通費等)	
事業費	3,512,271
(名作の舞台裏、放送人の世界、放送人の証言、放送人グランプリ他)	
4. 2007年度収支(1+2-3)	8,261,646
5. 預金、現金残高	
(みずほ銀行赤坂支店、郵便振替証書他)	8,261,646
6. 次年度繰越金	8,261,646

2008年度(平成20年度)予算案(一般会計)

1. 2008年度収入	13,461,646
前年度繰越金	8,261,646
会費収入(含入会金)	2,000,000
共催事業・助成金等	3,200,000
2. 2008年度支出	10,300,000
一般管理費	3,450,000
事業費(含予備費)	6,850,000
3. 次年度繰越金(1-2)	3,161,646

2008年度(平成20年度)

日韓中テレビ制作者フォーラム予算案(特別会計)

(第8回日韓中テレビ制作者フォーラム福岡大会は、2008年9月24日(水)～27日(土)、福岡市・アクロス福岡で開催予定)

1. 特別会計収入	21,800,000
放送局協力金	6,500,000
各種助成金	13,800,000
繰越金・当会分担金	1,500,000
2. 特別会計支出	21,800,000
予備会議等事前経費	1,300,000
会場費・宿泊費	5,200,000
運営関係経費	15,300,000

以上

【あ】合川明 青木裕子 赤井朱美 秋田完 新井和子 有馬哲夫 石井彰 【い】石井清司 石井ふく子 石橋冠 磯野恭子 磯村健二 市岡康子 一色伸夫 伊藤雅浩 井上良介 岩澤敏 【う】上田千秋 碓井広義 歌田勝彦 宇野昭 浦田彰
 【え】江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】大蔵雄之助 太田敬雄 大西康司 大西文一郎 大野木直之 大原誠 大原れいこ 大山勝美 大類啓 大脇明 岡弘道 岡崎栄 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明 小河原正巳 沖野暲 荻野慶人 小田久榮門 織田晃之祐 【か】加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 片島紀男 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫 金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 上安平冽子 鴨下信一 川口健一 川口幹夫 川竹和夫 河邑厚徳 河村正一
 【き】岸田功 北川泰三 北川信 北出晃 北村美憲 北村充史 木村栄文 木村成忠 【く】楠美昌 工藤英博 隈部紀生
 【こ】小池勝次郎 河野尚行 児玉孝光 児玉久男 後藤和晃 小中陽太郎 小南武朗 近藤晋 今野勉 【さ】斎藤伸久 斎藤秀夫 齋藤寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均 桜井元雄 佐々木彰 佐々木欽三 佐藤秀山 佐藤利明 佐藤年 澤田隆治 沢田隆三 【し】重延浩 重村一 静永純一 嶋田親一 清水満 下重暲子 城菊子 【す】菅野高至 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典 鈴木克明 鈴木典之 鈴木道明 須磨章 【せ】せんぼんよしこ 【そ】曾根英二 【た】高島秀之 高戸晨一 高橋一郎 高橋啓 滝大作 武谷雅博 田澤正稔 田中昭男 田中直人 田原英二 田原茂行 【ち】千葉勉 【つ】露木茂 鶴橋康夫 【と】土居原作郎 堂本暲子 戸田佳太 外崎宏司 富永卓二 土門正夫 【な】中崎清栄 中澤忠正 中島僚 中田美知子 中谷英世 長沼士朗 永野敏一 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村耕治 中村英美子 中山和記 難波秀哉
 【に】新村もとを 西ヶ谷秀夫 西川章 丹羽美之 【の】野崎茂 信井文夫 【は】萩野靖乃 橋本潔 林健嗣 林裕史 原由美子 原田庸之助 【ひ】久野浩平 備前島文夫 【ふ】深町幸男 福田雅子 藤井潔 藤井チズ子 藤田晋也 藤久ミネ 【ほ】星田良子 堀川とんこう 【ま】松尾羊一 松平定知 松前洋一 松本明 松本修 松本国昭 【み】三上義智 水上毅 水野憲一 満島保夫 三村景一 三村千鶴 宮川鏡一 三宅恭次 明神正 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】守分寿男 諸橋毅一 【や】八木康夫 矢島良彰 藪内広之 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 大和定次 山根基世 山本恵三 【ゆ】湯浅和憲 【よ】横沢彪 横山英治 吉澤保 吉永春子 吉村直樹 吉村光夫 【わ】和田智允 渡辺紘史

新会員紹介：高戸晨一（元テレビ朝日）・永野敏一（元TBSビジョン）・織田晃之祐（元NHK 音響）

放送人の会：2008年度体制

名誉会長 川口幹夫
 幹事・特別顧問 大山勝美
 代表幹事 今野 勉
 【幹事】石井彰、石井清司、石橋冠、磯村健二、伊藤雅浩、荻野慶人、加賀美幸子、金平茂紀、北村充史、斎明寺以玖子、寒河江正、坂元良江、桜井均、鈴木典之、長沼士朗、西川章、萩野靖乃、林健嗣、久野浩平、堀川とんこう、松尾羊一、村上雅通、山路家子、山田尚、隈部紀生、小池勝次郎、渡辺紘史
 【事業委員会】委員長 荻野慶人
 ☆放送人の証言 ○久野浩平、隈部 大山、萩野
 ☆名作の舞台裏 ○石橋冠、萩野、堀川、林
 ☆放送人の世界 ○今野勉、坂元、桜井
 ☆人気番組メモリー ○大山勝美、加賀美、トキモナタリー ○鈴木典之、桜井
 ☆シンポジウム ○斎明寺以玖子、金平、山路
 ☆研究会 ○石井清司、坂元
 ☆会員交流 ○西川章、伊藤
 ☆地域交流 ○村上雅通、林、寒河江、磯村
 ☆日韓中 ○山田尚、村上、鈴木、河野尚行、長沼
 【広報委員会】委員長 松尾羊一
 ☆会報 ○松尾羊一、伊藤、鈴木
 ☆WEB ○伊藤雅浩
 ☆ラジオ ○石井彰
 【総務委員会】委員長 北村充史
 ☆総務担当 ○北村充史、山田、小池
 ☆放送人グラウンド ○堀川とんこう、北村

（☆印はプロジェクト、○印はチーム）

編集後記

新聞で目にした投稿句だったか、かたつむりどこで死んでもわが家なり 窓ガラスを這う蝸牛を病床でじっと眺めてる・・・家族と離れ長い病院生活を送る老人が徒然のままに詠んだか。

なにも後期高齢者呼ばわりで憤慨の我ら平成ジジイにかぎらぬ。鎌倉初期の随想家は貴族社会の滅びを見て今で言う「居場所」を蝸牛に擬し、あれこれ考えた◆「たましき（立派な）都のうちに、棟を並べ、甍を争える、高き、いやしき、人の住ひは、世々を経て尽きせぬものなれど」、やれ飢饉水害、火災、地震、争いごととうち続き、賀茂川、大原山と幾度となく居を改め「世の人のすみかをつくるならひ、必ずしも、身のためにせず」と達観し「廣さはわづかに方丈、高きは七尺がうちなり」のちっぽけな移動式ボロ家を作った。何かあれば車で運び、転々と場所変えるか◆で、鴨長明、琴、琵琶、往生要集などにわずかの抄物（書籍）を假の庵に託し、かくて「あしたに死に、ゆうべに生るならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。不知（しらず）生まれ死ぬる人、何方より来たりて、何方へか去る」と。◆天野進平さんの闘病記はひとごとではありません。あすはわが身、されど閑居無常の日々もまたたのし、でしょうか。（松）